



東京芸術祭 2023 芸劇オータムセレクション

東京芸術劇場 Presents 木ノ下歌舞伎「勸進帳」

監修・補綴：木ノ下裕一 演出・美術：杉原邦生 [KUNIO]

Kinoshita-Kabuki “Kanjincho”

あらゆることを「交換」しつつ 境界を越える上演に

“現代における歌舞伎演目上演の可能性を発信”する木ノ下歌舞伎が、東京芸術劇場と組んで代表作の深化に挑戦。再創造に託す主宰・木ノ下裕一の想いとは？

2010年、当時企画員だった杉原邦生の演出により初演され、16年には改訂版を国内4都市で上演。18年にはパリ公演も行った「勸進帳」は、間違いなく木ノ下歌舞伎＝キノカブの代表作のひとつだ。その「勸進帳」が今秋、三度生まれ変わってさらなる旅に出る。

「キノカブの中でも上演頻度が高く、特に16年版は同じメンバーで海外含む多くの舞台を踏んでいる。だからこそ東京芸術劇場さんとのタッグでしかできない、様々な“挑戦”の受け皿になり得ると思っています」とは木ノ下の弁。言葉通り、木ノ下自身がツアー各地で事前にワークショップを行う他に、作品に関するレクチャーの実施や学生の団体鑑賞、視聴覚障がいのある観客への鑑賞サポート、日本文学研究者のロバートキャンベルと音楽家・鈴木優人と木ノ下がそれぞれ語り合うスペシャル・トークの開催・配信など、公演から枝葉を伸ばし、観客の好奇心や知識欲を刺激する企画が山盛り用意されているのだ。

「いろいろな土地で、一人でも多くのお客様に作品を届け、観ていただきたいと創り手なら誰

もが願っているはず。でも一つ間違ると、自分たちの作品を“正解”として押しつけかねないと、最近考えるようになりました。ならば創作の背景や前後にあるものまで、できる限りのものを手渡し、より自由に作品を受け止めていただけるようお手伝いができたら、と。それに、出会ったお客様の意見や感想、反応から僕らがいただくものもとても多く、そこには対等で豊かな“交換”関係が成立すると思っています。東京芸術劇場さんは僕らと協働し、高い志と経験値でそんな創作とは別の、創り手の欲望を叶えるべくバックアップしてくださる。こんな有難いことはありません」(木ノ下)

また演出・杉原の発案で、オーディションで選ばれた若手俳優二人を座組に加え、稽古代役だけでなく彼らの出演する回も設けるとい

う。「若い俳優と出会い、活躍する場や機会を作りたい」と強く願っていた杉原さんに触発され、実現した取り組みです。二人が入ることで、16年版である程度固まっていた『勸進帳』という作品を、別の角度から見つめ直す機会になるとも



© 東直子

思っています」(木ノ下)

改めて、木ノ下歌舞伎版の「勸進帳」という作品をどう解釈するかを訊くと、「政治的な対立、民族や階級、虚実や善悪など様々な分断について考えさせられる設定のドラマで、演出の杉原さんはそこから現代にも通じる“境界と分断”の構図を抽出し、舞台上に刻みつけてくれました。再演時よりさらに失望や困窮が世界を席卷する今、『勸進帳』の再創造と上演を通し、僕らなりに世界に向かい合いたいと考えています」とアツい言葉が返ってきた。

時代を映し、古典に新たな息吹を吹き込み更新する木ノ下歌舞伎の創作。そこに立ち上がる「今」を、是非体験して欲しい。

取材・文：尾上そら (ライター)

公演関連プログラム

- 特別対談映像配信(7月上旬～)
木ノ下裕一×ゲスト：鈴木優人
- 有料トークイベント(9月23日⑤開演予定)
木ノ下裕一×ゲスト：ロバートキャンベル
詳細はHPにてご確認ください。



木ノ下歌舞伎「勸進帳」(2016)
監修・補綴：木ノ下裕一 演出・美術：杉原邦生
撮影：井上嘉和 提供：KYOTO EXPERIMENT 事務局

9月1日⑤～24日⑩
シアターイースト 詳細はP12へ

監修・補綴：木ノ下裕一
演出・美術：杉原邦生 [KUNIO]
出演：
リー5世 坂口涼太郎 高山のえみ
岡野康弘 亀島一徳 重岡漢 大柿友哉
スウィング：佐藤俊彦 大知

沖縄、上田、岡山、山口、水戸、京都公演あり



東京芸術祭 2023 芸劇オータムセレクション

太陽劇団(テアトル・デュ・ソレイユ)「金夢島」

L'ÎLE D'OR Kanemu-Jima ※フランス語上演(多言語の使用場面あり)・日本語字幕付き

ついに来日する伝説の劇団、 新作のテーマは夢の中の日本

太陽劇団、22年ぶりの来日公演は、空想上の日本を舞台にした作品。出演者・スタッフ総勢65名、多国籍なメンバーたちが見せてくれる夢の日本に私たちも旅立とう！

パリ郊外の森の中に、世界の演劇人たちが夢見る劇場がある。1960年代、弾薬庫だった建物(カルトゥーシュリ)で始まったこの演劇活動は、アリアーヌ・ムヌーシュキンの太陽劇団としてその名を知られるようになった。美術制作のための吹き抜けの作業場、世界の楽器を収集した楽器室、人形や仮面製作の工房、客席のある稽古場。衣装用の倉庫には過去の衣装が保管されており、役者たちが稽古で引っ張り出すことができる。ここは、ひとつの理想郷だ。

作品が仕上がると、劇場のホワイエは演目に想を得た内装になる。開演前は、作品に縁のある食事を俳優たちが提供する。客席の真下には共有の楽屋スペースがあり、のぞき窓のある幕を通して準備中の俳優たちを観察することができる。そして席に向かうと、御大アリアーヌが立っていて、まるで古い知り合いのようにチケットの席を確認してくれる。終演後は、出演者による音楽パフォーマンスまでである。観客が、この場所にやってくたら、公演の前後を含め祝祭的な時間と空間を体験するのだ。

太陽劇団は、1964年の旗揚げ以来、古典や現代作品を上演し続けてきた。世界情勢への関心度も高く、紛争地域を含めた世界中から俳優を受け入れ、彼らの出身国の表現手法をワークショップなどで共有している。これが、劇団作品に漂うヒューマニズムにつながっているのかもしれない。そして客席には、さまざまな世代が混ざっている。創設当初から観ていそうな演劇通、若い学生たち、家族連れ……世界の文化に心と目が開かれている人たち特有の空気が、この客席には満ちている。

劇団発足前の1963年に日本に滞在したアリアーヌは、大衆演劇に触れ、能や狂言といった古典芸能に注目し、その重要性を早くから俳優たちに説いてきた。2017年頃、そんな彼女が日本を舞台とする作品を創るべくリサーチを開始したとの噂が立った。その作品は、コロナによるロックダウンの波をかいくぐり、幾多の困難を乗り越えて2021年について初演された。世界初演の当日、アリアーヌは82歳になっていたが、やはり入り口で観客を迎え、チケットを確認していた。



© Inamori Foundation

太陽劇団の本拠地で私が観た本作は、夢の中の日本を描いたものだった。夢だから、現実の日本とも異なり、人物の顔もぼんやりしていて、流れには飛躍があるが、各シーンの転換が息をのむほど美しい。役者たちの重心は低く、まるで彼らが奏でる音楽のようだ。そのようにして、色彩豊かで、音の感触、木の香り、湯気、風景のディテールがリアルに立ち上がる。そんな夢をフランスの観客たちは共有し、体験した。この夢には、団員たちのイマジネーションが重なっている。彼らが、一年半に及ぶ劇団創作で数々のシーンを生み出したからだ。

演劇とはそもそも、舞台と客席が共に見る夢である。作り手が自分の魂を映し出し、観客はそれぞれの状態を投影して受け取る、集団で創作される夢である。集えることの尊さが実感される今日、同じ時代に生まれた証として、私たちは迷わずこの夢の中に飛び込めばいいのである。 文：副島綾(舞台芸術アドバイザー)



© Michèle Laurent

10月20日⑤～26日⑩ ※23日⑤休演 プレイハウス 詳細はHPへ

作：太陽劇団(テアトル・デュ・ソレイユ)
演出：アリアーヌ・ムヌーシュキン
創作アソシエイト：エレヌ・シクスー
音楽：ジャン＝ジャック・ルメートル
出演：太陽劇団(テアトル・デュ・ソレイユ)

京都公演
11月4日⑤・5日⑩ ロームシアター京都 メインホール

特設サイト

<https://rohmtheatrekyoto.jp/lp/theatre-du-soleil-japan2023>

